

地域防災活動におけるレジリエンス

～川崎市多摩区中野島町会「防災マップ」づくりの事例から～

専修大学人間科学部社会科学科教授 大矢根 淳



1. 中野島町会での「防災マップ」づくり

川崎市多摩区内に立地する3大学（専修、明治、日本女子）と同区では、文教都市としてふさわしい地域社会づくりを目指そうと、平成17年に協定を結び、多摩区・3大学連携協議会を設立した。平成19・20年度の専修大学との取り組みとしては「災害・防災」がテーマ化されたことから、「中野島町会防災マップ」づくりに私の研究室が参加させていただくこととなった。以後、町会とはお付き合いが続いている。

中野島町会のHPによると地域の概況は以下のとおり。

…北は多摩川、南は二ヶ領用水に囲まれた自然豊かな平坦な地で、町の中央部を通るJR南武線の中野島駅を中心に、街並みを形成しています。農地の宅地化が大分進んできてはおりますが、市内では梨の生産地として知られ、豊かな自然環境や住環境に恵まれたのどかな町です。町内の人口は約24,000人、11,000世帯が住んでおり、町内には6つの自治会と町会があり、中野島町会連合会を組織し、安全で、安心して暮らせる町づくりを目的として、連携しております。

駅近くにもまだ広い梨園がいくつも残る一方、そのすぐ側には工場跡地に建設されたRC造14階建が6棟つらなる700戸もの大規模マンションもある。また、消防団活動が活発で、それが町会活動をも牽引していて、例えば町会では毎年「花壇コンクール」を開催して、各家の素敵な花

壇が「ロードマップ」としてHPで紹介されている。このロードマップとともに町会にはさらに防災に関連して二種のマップが存在する。一つは区が作成しHPで提供している「多摩区安全・安心防災マップ」で、そこには避難場所・町内会館・備蓄倉庫、消防団器具置場・消火栓・街頭消火器、AED設置場所などがマッピングされている。もう一つのマップがここで紹介する「中野島町会防災マップ」である。町会の皆さんとの取り組みの過程を振り返りつつ、ここでの「防災マップ」づくりを概説してみる。

まずは、「防災マップ」の理念と意義について。多くの自治体や町会で、防災マップづくりが盛んだ。しかしながらそれらを精査してみると、実はその多くは結局、資機材配置図を作成しているに過ぎず、「防災＝災いを防ぐ」という目的は達せられていないように見える。町会範囲図に消火栓や防災倉庫、最近ではAEDの設置場所等が記されている地図をよく目にするが、それはあくまで資機材配置図であって、そこには「防災」のプロセスは載っていない。「防災」とは「災いを防ぐ」という「(社会的) 行為」であるから、「防災マップ」とは、そこに「災いを防ぐ行為」が顕現されていなくてはならない。つまり、そのヘルメット(防災倉庫に所蔵)を誰がかぶり、そもそも何のためにかぶり、かぶった人が何をするのか。資機材を活用した防災行為が具体的にイメージされて演じられる場(劇場)が町会地図(という舞台の

上) のはずである。防災マップは防災図上演習の舞台である、と考えられよう。ところが巷にあふれる「防災マップ」は、実際は単なる資機材配置図であって、それを作成したことで、防災マップが作成されたと誤解されてしまっていて、さらには地



写真1 「開けてみな」「いいの、開けちゃって?」



写真2 まち歩きの見聞を自作地図に載せていく

域の防災がそれで成し遂げられたと早合点されてしまうこともあるようだ。実際は、消火栓がマッピングされていても、その消火栓にホースを接続し、その筒先を持って延焼家屋に放水する（できる）主体が現存していなければ、消火栓は単なる道ばたの赤い鉄パイプでしかない。

中野島町会防災マップづくりでは、この「防災マップづくり」の理念と意義を十分理解しようとするところからスタートした。そして、その上で、まち歩き、地図づくりのワークショップを進めて行った。

まずは、みなで地図を作製する。住宅地図をコピーして丁寧に張り合わせる作業を通じて、まちの機微を再発見しながら町内各所の位置関係、距離や方位を確認する。その際に重要なのは、この地図づくり・まち歩きは、三世代、できれば四世代（曾お婆ちゃんや妊婦さんも）で行うことだ。

次にその地図を頼りにまちを歩く。これはまだ何も災害が起こっていない現在のまちを歩くのであるが、そこでは、複数世代の参加者が、そこで個々に感じたこと、見出したことを地図の余白やノートに記しながら歩く。その際に、ここは危険だなと思うところがあればそれを記し、もしかしたら、これは被災時には活用できるかも知れない、というものがあれば、合わせてそれも記す。いわば、「危険」と「資源」を探り出す「わがまち再発見」のまち歩きである。中野島ではジュニアリーダーという町会の小学生達が、大人の知らない小径を教えてくれたり、消防団員が分団員の勤める工務店を指して、「こいつん家にはボールや、さらには

フォークリフトまであるから、それを倒壊家屋からの救出に使わせてもらおう」と思いつき、その場で訪問してその約束を取り付けてしまった。

町会の一部には木造の古い一戸建ての密集する街区がある。消防事情に詳しい消防団員は、そこを「木造老朽家屋密集地区」と説明しながら皆を導いた。ゆっくり辺りを歩きながら、その街区の思い出話に花が咲いた。昔に比べてこの通りは大分、見通しが良くなった、そういえば、相続や建替のおりにセットバックするし、隅切も行われるから、昔は車も通れなかったこの辺りも、今では宅配便のトラックが入れるようになった…。それで思い出してみると、自分がかれこれ30年も消防団をやっているけれども、この街区は火災を出していないな、ボヤがあったのは、向こうの街区の新築されたアパートのほうだったな、というように事実が次々に確認されていくこととなった。

まちを歩き終わったら、町会会館に戻り、地図に知見を書き込んでいく。最後に触れた「木造老朽家屋密集地区」は、建替（更新）られるべき危険な街区ではなく、防災上（さらに生活文化上）豊かな履歴を有した、自分たち中野島っ子にとってかけがえのない街区であることが改めて確認されて、「火災危険地区」ではなく、「豊かな木密」と高らかに称されることとなった。その辺りに何世代にもわたって住んでいる消防団員の一人は、その表情が次第に軟らかく、そして、誇らしげにかわっていき様を皆で確認した。

このまち歩き、知見とりまとめの地図は、防災

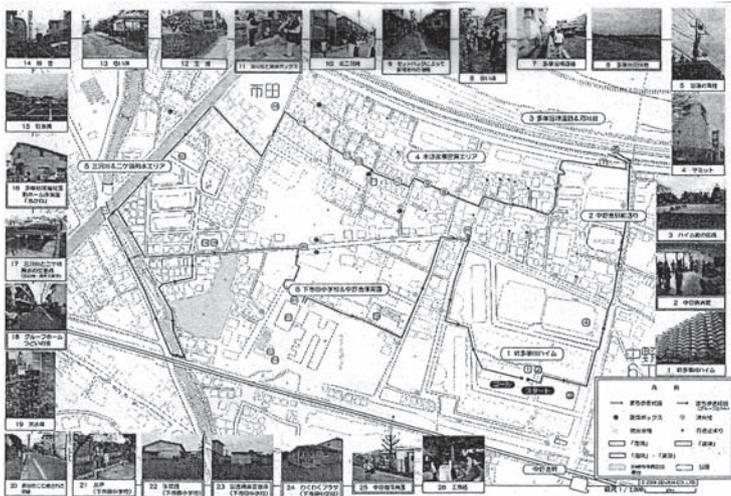


図1 中野島町内会防災マップ
(発災ゼロ時点地図：危険と資源、H20年度版)

マップの前段階の、いわば「発災ゼロ時点地図」である。防災とは、災いを防ぐ社会的行為だから、防災マップは、想定される災いを防ぐ行為をその地図という舞台上演する演習となる。これを行うには、演題を決め、シナリオを作ることが必要となる。そのシナリオは、小学校の学芸会の劇の台本のように作ればよい。大道具・小道具は、地図の上に駒を置いて、人や車両に見立てればよい。問題は、なるべく客観的なシナリオを書くために、県・市の被害想定を町会範囲に精確にブレイクダウンする算術が必要となるが、それは、地元消防署の警防課とか区役所担当部署に相談して算出のアドバイスをお願いすればよいだろう。

シナリオは例えば、「一幕一場：〇〇町会の安否確認」などとして、発災から1時間程度のことから考えてみるといいだろう。救出救助、避難所開設運営、仮設住宅・商店街の設立…、と様々な幕・場が想像されよう。実際に配役を考え始めると、実はその人は出勤していて地域には不在であるとか、あのアパートについては情報は一切ないとか、屋敷裏のアパートに通じる小径のブロック塀が倒れて通れないだろうとか…、麗しく想像(創造)してみたいシナリオが実はズタズタであ

ることなどが事前に見えてきてしまうこともある。難局をいかに乗り切っていくか、その街区の被害想定のもとで、独自の対応シナリオが創造されていく過程は、参加者にとって刺激的だ。

2. レジリエンス (resilience) 概念の普及

最近、防災社会(工)学の領域でレジリエンス(resilience)概念が脚光をあびている。そもそもは精神病理学の用語で、逆境からの回復の力(竹のようなしなやかさ!!)を表したものであったが、そこから

コンピュータ・サイエンス領域におけるシステム復旧能力や、経営学におけるBCP(Business Continuity Plan=事業継続計画)に、その考え方は取り入れられて普及した。社会科学領域には、環境研究サイドから、ローカルな発想や共同性という視点を、公共性を考える際には取り入れて行くべきとして、専門家の科学知と地域住民の生活知を融合して、公共知としてレジリエンスを獲得する過程に着目する実証的研究として重ねられてきた。

これが災害社会学領域では「復元-回復力」概念として翻訳されて導入・精緻化された。ここではレジリエンスは、被災に対峙する力、地域や集団の内部に蓄積された結束力やコミュニケーション能力、問題解決能力などに着目する概念として紹介された。そして、地域を復元-回復していく原動力は、その地域に埋め込まれ育まれてきた文化や社会的資源のなかに見い出されると説かれた。

中野島防災マップづくりのスタートとしての「発災ゼロ時点地図」づくりの過程は、実は地域の危険とともに資源を見出す、すなわち、レジリエンス把握・醸成の日常生活行為そのものであった。

3. 事前復興と結果防災

レジリエンスと合わせて、首都圏とくに東京の地域防災の現場では「事前復興」という概念をよく耳にする。ここでは、この両概念の関連を考えておこう。

阪神・淡路大震災直後に、特に、被害のひどかったエリアには復興都市計画事業として重点復興地域が指定され、そこで土地区画整理事業が行われたが、その現場に研究実践として関わってきた防災工学研究者らは、そこでの合意形成の難しさを痛感し、これを教訓に、「仮説的『事前復興都市計画』」を唱えた。「災害が起こる前に考え準備しておくことで、事後の都市復興では迅速性・即効性が確保され、その過程での住民参加をより実効性のあるものにするはずである」という仮説である。

この「事前復興」概念は、防災まちづくりを実践する地域住民サイドからの要望を受けて、「都市復興マニュアル」と「生活復興マニュアル」の策定（1997年度）に繋げられ、その後、この二つのマニュアルは「東京都震災復興マニュアル」（2003年）に改訂・統合された。そこではキーコンセプトとして「地域協働復興」が示されていて、「行政」と「地域住民」らが「（防災工学者ら）専門家」の支援を受けて協働して復興に取り組む重要性がうたわれて、「震災復興まちづくり支援プラットフォーム準備会議」が設置された。そして、世界に先駆けて「震災復興まちづくり模擬訓練」が実施され、現在に至る。この訓練では、地域住民による「まち歩き」（ワークショップ）を通しての地域課題の把握、避難所生活から生活再建の道程をイメージするロールプレイ、暫定的な生活の場の形成のための「時限的市街地」の考察、地域ごとの復興方針の検討（復興まちづくり）とステッ

プを重ねている。豊島区では3年度にわたる上池袋でのこの「震災復興まちづくり模擬訓練」の取り組み成果を受け、今年度からは池袋本町を対象を展開している。区HP等を覗いてみて欲しい。

事前復興は防災まちづくりの図上演習の一種であるが、今回冒頭で紹介した中野島防災マップづくりは、こうした防災訓練実施の基礎となる地域イメージ獲得のための下地づくりに位置づけられる。こうした足許・近隣の諸社会関係の確認・把握があつてこそ、具体的な地域防災力は発揮される。さもなければいずれの防災メニューも砂上の楼閣・絵に描いた餅となってしまう。日常的な足許の諸点検、地域課題解決へのまなざし、その具体的な取り組みが、結果的には地域防災力の涵養・底上げにつながるということで、これを防災社会工学では「結果防災」と呼称している。

阪神・淡路大震災の時もそうであったし、今日もそうであるが、「防災」が声高に叫ばれている。しかしながら一方で、このような防災努力の喧伝は逆効果ともなりかねない。「そんなに脅かさないでよ、また防災？ もう十分だよ」と。ここに「防災と言わない防災」、その時々生活の足許を真摯にまなざし、その課題の解決を重ねていくことが、結果的に防災機能充実につながり（「結果防災」）、その過程でレジリエンスは高められる。

東日本大震災であらためて言われることの多くなった“絆”は、そもそも社会学的レジリエンス概念の説明で触れられていることから、すなわち、「被災」に対峙する力、地域や団体の内部に蓄積された結束力やコミュニケーション能力、問題解決能力」であることに気付いていただけたのではないだろうか。

多世代でまち歩きを重ねてみませんか？

参考文献

- 瀧本浩一, 2008, 『地域防災とまちづくり』イマジン出版。
- 「『簡易図上訓練』の実施と訓練用「被災シナリオ作成」の方法」『婦人防火クラブ リーダーマニュアル』（日本防火協会）。
http://www.n-bouka.or.jp/leader_manual/index.html
- 浦野正樹他, 2007, 『復興コミュニティ論入門』弘文堂